

身延山資料叢書 三

目錄集 三

身延山大学 東洋文化研究所

身延山資料叢書 三

目錄集 三

身延山大学  
金剛大学校

東洋文化研究所  
仏教文化研究所

# 目次

凡例……………2

章疏目錄……………11

付記……………51

## 凡 例

本書に収録した身延山久遠寺第十一世日朝筆『章疏目録』一冊は山梨県南巨摩郡身延町の身延山久遠寺内にあ  
る身延文庫に所蔵されている。身延山文庫の典籍資料の概要は、『身延文庫典籍目録』（上・中・下、平成十五  
十七年）三巻として身延山久遠寺より刊行されている。

既刊の『身延山資料叢書一』では目録部一として、通称「乾師目録」と「遠師目録」を紹介。また『身延山資  
料叢書二』では同じく目録部二として、通称「意師目録」と「西土蔵宝物録」「当山歴代等曼荼羅録」「宝蔵並中  
央之廊下拝殿一切経堂古仏堂録・会合所・方丈位牌堂録・書写並摺写経録」を紹介した。本書はこれらに引き続  
き目録部三として日朝筆『章疏目録』を紹介する。原本保護の側面より写真版の一部に不十分な箇所があるが、  
了とされたい。

本書中の書誌は左記の通りである。解説にあたって、筆者である日朝については身延山大学東洋文化研究所の  
木村中一所員が、その内容については今回の刊行にあたって共同調査（大学間学術提携の一環として行われてい  
る）を行った韓国・金剛大学校仏教文化研究所の金天鶴所長（身延山大学東洋文化研究所客員所員）がそれぞれ  
担当した。

身延山久遠寺第十一世日朝著『章疏目録』一冊

・法 量（全体）二八・八×一八・九（題簽）二〇・〇×三・五

・架蔵番号（部）当山十一世（著者）日朝（號）C、44（冊）1

・書 名「章疏目録」

※本書には明治期の身延文庫所蔵本修補作業時に新たな表紙が付された。本巻においてこの新表紙を「表紙」、元表紙を「元表紙」と表記する。

一、日朝について

身延山久遠寺第十一世日朝（一四二二～一五〇〇）は行学院と号し、室町期における日蓮教学を代表する高僧であり、身延山久遠寺発展の基礎を築いた人物である。日朝は伊豆国宇佐美に生まれ、幼少期に父を亡くし、伯父夫婦の養育をうけたと伝わる。永享元年（一四二九）四月八日、八歳の時、永享問答で名高い一乗坊日出に師事して得度。当初、三島本覚寺にて兄弟子らの薫育をうけたという。学問に秀でた日朝は仙波檀林に遊学し天台学を修めた。その長きにわたる研鑽態度については、嘉吉二年（一四四二）には佐渡、さらに京都へも遊学し、さらなる学問研鑽をなしたことからもうかがわれる。伝承では師である一乗坊日出より三島本覚寺を委ねられ、さらに鎌倉本覚寺をうけて両寺を兼務するようになったという。数えきれない法華経の講義や法談を重ねた日朝は、寛正三年（一四六二）四月身延山第十世であった観行院日延の示寂をうけ同年、身延山第十一世の法灯を継承した。四一歳のことであった。

日朝は明応八年（一四九九）弟子であった、『身延山資料叢書二』収録の「意師目録」の筆者である円教院日意に身延山を譲るまで、三八年にわたって貫首職を勤め、寺院運営と教学及び教育の面に尽力した。運営面では諸堂の移転が挙げられ、身延山内の伽藍整備に尽力している。また身延山の年中行事・月行事の制度を定め、法則を制定して運営の面の整備をなした。教学及び教育面では、まず日蓮聖人遺文の蒐集に尽力し、『録内御書』書写と同時に『録外御書』の蒐集にも努めている。さらにこれらを基とし遺文の註釈書である『御書見聞』四四巻、日蓮聖人伝である『元祖化導記』二巻の執筆にも力を注いだ。また法華経の註釈書である『補施集』一一二巻、『法華草案抄』一二巻など、その著作は枚挙にいとまはない。

さらに日朝については多くの伝説がある。一例を挙げると、数限りない教学書などの執筆により一時は眼病を患らったが、やがて回復。さらなる学問研鑽に勤しんだ日朝はこれより「眼病平癒の師」として奉られるなど、その超人的な人物像が取り上げられることとなる。そんな日朝であったが、明応八年には弟子である円教院日意に身延山久遠寺第十二世の法灯を譲り、翌明応九年（一四五〇）六月二五日に七九歳をもって、その生涯を閉じたのである。

（木村中一）

## 二、日朝筆『章疏目録』の書誌学的考察

### 1. 目次について

本『章疏目録』は以下のような目次となっている。まず、最初は天台宗師について章疏目録が揃えられている。

（\*「ママ」は筆者のもの。また、常用漢字に統一する）

|        |                                |
|--------|--------------------------------|
| 章疏注文作者 |                                |
| 南岳大師章疏 | 一二部                            |
| 天台大師章疏 | 四九部                            |
| 章安大師作疏 | 又云灌頂大師 幼云法雲師<br>一一部            |
| 妙楽大師作疏 | 又云湛然六祖荆溪<br>明曠和尚妙楽ノ御弟子也<br>三一部 |
| 行滿和尚作疏 | 五部                             |
| 道遂和尚作疏 | 一部                             |

|            |     |
|------------|-----|
| 道暹造疏       | 六部  |
| 智度章疏       | 二部  |
| 伝教大師章疏     | 五〇部 |
| 慈覚大師章疏     | 六九部 |
| 智証大師作疏     | 六六部 |
| 五大院章疏      | 一四部 |
| 恵心撰章疏      | 四二部 |
| 兜率先徳造疏     | 一三部 |
| 條禅院和尚尋禅造疏  | 三部  |
| 金竜寺千観内供奉御釈 | 三部  |
| 別当大師造疏     | 四部  |
| 修南山道宣造疏    | 四部  |
| 当宗先徳等造疏    | 二三部 |

以上、ここまでが天台宗の文献であり、続きはその他の文献である。

他宗人師造疏目録

|             |               |     |
|-------------|---------------|-----|
| 法相宗慈恩寺基法師作疏 | 玄奘弟四弟子        | 二七部 |
| 淄州恵紹大師造疏    | 基法師弟子也        | 七部  |
| 智周章疏        | 又云摸揚大師恵紹之第一弟子 | 六部  |

|              |             |       |
|--------------|-------------|-------|
| 華嚴宗法藏法師造疏    | 香象大師大周也     | 二六部   |
| 淨影寺華師造疏      | 又云惠苑大師法藏弟子也 | 一四部   |
| 三論宗嘉祥寺吉藏師造   | 信詮弟子也       | 二九部   |
| 新羅国興論寺元暁法師造疏 | 法藏第二弟子      | 三部    |
| 他宗人師所造疏      |             | 三九部   |
| 東大寺沙門 長戴造    |             | 五部    |
| 浄土宗善導造疏      |             | 七部    |
| 菩薩造論同記       |             | 二八部   |
| 諸三藏所訳経目錄     |             | 四部    |
| 諸法門名義立処      |             | 二六部   |
| 翻名集          |             | 二一九項目 |
| 外伝弘次所引目錄     |             | 六四部   |

以上が目次に沿って把握される章疏目錄である。『章疏目錄』と雖も、「翻名集」という梵語の訳語の集成が入っているのも本目錄の特徴として挙げられる。目次を検討すると、天台宗は中国と日本とに分けていることが分かる。すなわち、中国天台宗師は南岳惠思より智度まで八人、そして伝教大師より別当大師光定まで九人が日本の天台宗師である。次が唐の道宣、そして「当宗先徳等造疏」には義真をはじめ、二三人の文献が記載されている。人物について大体生没年代の順に目次を立てているが、日本の場合、伝教大師（七六七～八二二）の次の来るべき、別当大師光定（七七九～八五八）が後ろにきている。そして、光定の前の、千観（九一八～九八四）は安然（八四一～九一五）の後に位置すべきである。また、道宣を天台宗に属しているとみながらも、「当宗先徳等造疏」

の前に配置のも異様といえよう。この点については筆者は、正確な天台宗師とみていないからであろうと推察される。

天台宗以外の人物の文献に対しては、「他宗大師造疏目録」として天台宗の文献と大別している。その中に入っているのが、中国法相宗三人、中国華嚴宗二人、三論宗一人、新羅元曉、浄土宗、他宗一般、東大寺沙門であり、宗派乃至は地域を分類し、続いて菩薩の論、訳経僧の翻訳経目録、名義に関連する文献、そして外伝とを区分している。

ところで、各目次の次にポイントを下げ「又云」として現している割注の形式の中に正しくない情報が混雑していることがある。例えば、日本天台宗師の中に、「別当大師造疏 又云寂光大師」となっているが、寂光大師とは天台宗第二代座主の円澄（七七一～八三六）のことであり、別当大師は天台宗第三代座主光定（七七九～八五八）である。道宣については「修南山道宣造疏 又云宗密」となっているが、本来は道宣（五九六～六六七）と宗密（七八〇～八四一）とは同じく終南山に住したこと以外は、まったく関係はない。さらに、他宗に関しては、「浄影寺華師造疏 又云惠苑大師法蔵弟子也」となっているが、華師が何を意味しているのか明確でない。そして、浄影寺慧遠（五二三～五九二）と静法寺惠苑（六七三～七四三？）が住した寺院に対する情報不足で起こったと見られるが、実際の文献をみると、慧遠のものも記載されているので、二人の区別が付かなかった可能性も残る。元曉については、法蔵の弟子であるという割注は、それほどおかしくない。早い段階からそのような伝承が日本ではあったからである。

各目次に記載されている文献の特徴について検討した結果、項目と関連のない文献が含まれていると疑われるケースもある。これに関しては紙面の関係上、その例を南岳大師章疏一二部や部数の少ない例をいくつか検討するに止まるが、目録を活用する前に詳しく調べる必要があると思われる。

南岳の著作については次のようになっている。ここでは目録に示している巻数と振り分けされた紙の数に関する

る記録は除くこととする。

『大乘止観』 『四十二字門』 『無諍三昧』 『受菩薩戒文』 『安樂行』  
『発願文』 『隨自意三昧』 『大乘入道章』 『法華懺法』 『心要』  
『法界次第』 『宗円義』

この一二部の中、三部は南岳の著作としては疑わしい。『大乘入道章』は智周の著作と見られ、『法界次第』は天台の著作とみられる。さらに、『宗円義』は南岳恵思の著作と見てよいかどうか、今の段階では確定できず、現物を確認する必要がある。

次に章安大師作疏一部をみる。

『涅槃經玄義』 『大經未再治疏』 『国清寺百録』 『観心論疏』 『天台揺讃』  
『仁王經私記』 『止観大意』 『法華大綱』 『法花大意』  
『天台大師別伝』 『八教大意』

この一二部の中、確実な章安大師作は六部に過ぎない。『止観大意』と『法花大意』は湛然の著作とみられるし、『大經未再治疏』は湛然の涅槃經再治本の原本であるならば、かなり価値のあると考えられるものであるが、確実でない。また、『法華大綱』は伝教大師の作とされるが、『天台揺讃』については誰の著作なのか明確でない。

最後に行滿和尚作疏五部についてみてみたい。その五部とは、

『涅槃經私記』 『涅槃經音義』 『円教六即義』 『天台宗法門大意』  
『法華大意』

となっている。ここで確実に行滿の著作と認められるのは三部である。『涅槃經音義』は三階教信行の著作の可能性も残っており、『法華大意』は湛然のものようである。

以上、天台宗の人物の中、著作の数が少ない文献のみを検討してみたが、実物を見る前には断定できないし、他の目次に関してもまず、目録上で詳しく調べておく必要がある、それによって新しい分類が可能であろう。

天台宗以外の文献として注目したいのは、新羅の文献である。まず元暁である。元暁の著作は福士慈稔教授の目録などを詳細に調べることによって、一〇〇部ほどあったことがわかるが、本『章疏目録』には僅か三部しか記載していない。それは

『判比量論』 一卷 『勝万経疏』 上下 『広百論撮要』 一卷

である。本『章疏目録』において元暁の多くの著述の中にただ三部のみ記載されているのは、それがそれまで実在したということであると考えられる。そこで、その三部を検討するに、『判比量論』は断簡が大谷大学に所蔵されており、残り二部は逸失文献である。この二部が発見されたならば、韓国の仏教学会に反響を呼ぶと思われる。他に「他宗人師造疏目録」の項目には、璟興の『下生経疏』、円測の『理門論疏』二卷、道澄の『入正理論疏』、玄範（新羅人説あり）の『入正理論疏』一卷が記載されている。これらの文献も現存していないため、発見を期待される。

以上、簡略ながら本『章疏目録』について考察したが、これらの文献は、日蓮宗内の宗学を深めるための調度

章疏であつて、当時の日蓮宗の学風を読み取れるものであると思考される。また、その目録の中には、現存していないものも多くあると指摘でき、これらの存在が確実にされれば世界の仏教学界に大いに貢献することは間違いない。

(金 天鶴)

本書を収録刊行するに当たっては、所蔵者である身延山久遠寺御当局のご理解とご許可を賜った。

また、身延文庫並びに宝物館の関係各位には、原本の調査に特別のご高配を頂いた。記して感謝申し上げます。

章  
疏  
目  
錄

## 付 記

本『身延山資料叢書三』は平成二五年一月二八日（月）～三一日（木）に行われた身延山大学東洋文化研究所と韓国・金剛大学校仏教文化研究所の学術交流共同調査（身延山大学図書館蔵坂本文庫・身延文庫所蔵書籍）の成果を基として刊行した。

当共同調査の参加者は左記の通り。

（身延山大学）

望月 海慧（身延山大学東洋文化研究所長）

三輪 是法（身延山大学東洋文化研究所員）

木村 中一（身延山大学東洋文化研究所副主任）

（韓国金剛大学校）

金 天鶴（韓国・金剛大学校仏教文化研究所長）

朴 英吉（韓国・金剛大学校仏教文化研究所員）

（調査協力）

ジッリオ・エマヌエーレ・ダヴィデ（東京大学大学院人文社会系研究科アジア文化研究専攻〈博士課程〉）

桑名 法晃（立正大学大学院文学研究科仏教学専攻〈修士課程〉）

（身延山大学東洋文化研究所）

本資料集は大韓民国の政府の財源による韓国研究財団人文韓国事業（HK）の支援を受けて作成されたものである。（NRF-2007-361-AM0046）

（金剛大学校仏教文化研究所）

身延山資料叢書 三 目録集 三

平成二十五年三月三十一日 発行

編集（本巻担当）

身延山大学東洋文化研究所 木村中一

金剛大学校仏教文化研究所 金 天鶴

発行所 身延山大学 東洋文化研究所

〒四〇九―二五九七

山梨県南巨摩郡身延町身延三五六七

TEL (〇五五六) 六二一〇一〇七